

【氏名】 青木(高柴) 加奈子

【所属大学院】(助成決定時)

奈良女子大学大学院

【研究題目】

カップルの子ども観・家族観が女性の出生行動へ与える影響

— デンマーク社会をフィールドとして —

【研究の目的】

デンマークの合計特殊出生率(Total fertility rate; TFR)は人口置換水準を下回り、デンマークは「少子化」社会である。しかし、公的機関主導の育児支援政策が子どものいる家族をサポートすることによって、高い女子労働力率を維持したまま、工業先進国の中でも比較的高い TFR を示している。つまりデンマークは、女性が仕事と出産・育児の両立を可能とする社会であるといえる。

育児環境の整備が女性の出産を促進することは多くの先行研究から明らかとなっているが、デンマークの女性は本当に子どもを産みたいときに希望する数の子どもを産んでいるのだろうか。そこで本研究では、デンマーク社会をフィールドに、女性が出産選択をどのように行っているかをインタビュー調査から明らかにする。その際、男性にもインタビューをすることによって、これまでの出生行動研究では抜け落ちていた男性パートナーからの影響についても考えていく。

【研究の内容・方法】

□調査期間:2007年11月~2008年5月(デンマーク滞在は2007年9月~2008年6月)

□調査対象者:25歳~53歳の男女19人(男性7名、女性12名)。調査を行った被調査者に新たな調査対象者を紹介してもらうという「雪だるま方式」で調査対象者に出会った。

●カップルのペアサンプルは6組である。このうち1組のみ法律婚に準じるカップル形態である「非法律婚」だった。すべてのカップルに少なくとも1人の子どもがいた(調査時点で第1子妊娠中を含む)。

●女性だけのサンプル6組のうち、「子どもなし・パートナーと同居」が1組、「子どもなし・パートナーと法律婚」が1組、「子どもあり・パートナーと非法律婚」が1組、「子どもあり・パートナーと死別」が1組、「子どもあり・パートナーと法律婚」が2組である。

●男性だけのサンプル1組は、「子どもなし・パートナーと同居」である。

注1:インフォーマントのうち、中国系デンマーク人が1名、イギリス国籍が1名(それぞれ女性。パートナーはデンマーク人)である。

注2:「雪だるま方式」のため、インフォーマントの属性は、全体的に「都市部在住の高学歴層」と偏りが生じた。

□調査方法:半構造化面接。誕生から現在までのライフヒストリーを語ってもらいながら、「子ども

観」「家族観」「出産のタイミング」「希望子ども数」「仕事と家事・育児の両立の状況」「公的サポートの利用状況」の質問項目に答えてもらった。

□調査時間：約48分～110分。調査場所はインフォーマントが指定した場所である（自宅、大学構内のカフェ、市内のカフェ）。

【結論・考察】

調査過程で、「子どものいる家族形成をしたカップルの出生行動」に焦点を絞ったため、「子どもなし・パートナーと同居」（20代男女各1名）、「子どもなし・パートナーと法律婚」の被調査者を除いた16名で分析を行った。結果は以下のとおりである。

男性からは、「学業を終え、就職をして安定した収入を得るまでは、子どもを持つということはまったく考えられなかった」（30代男性）という語りが多くきかれた。第2子以降になると、自身の希望はあるものの最終的には妻次第と考えている場合が多い。追加の子どもの出産・育児によって、男性よりも女性のキャリアの中断が長くなってしまいうために、女性が希望するライフプランを優先させたいという男性の配慮であると推測される。

一方多くの女性は、在学中の出産を良いタイミングだと考えている。この理由として時間的な余裕だけではなく、就職の際に採用側の企業は、就職前に出産を経験している女性は未経験者よりも就職直後に出産・育児休暇を取る可能性が低いため前者の女性を採用したいと思うのではないかと考え、女性たちは就職前の上産は有利だと思っている。

以上のことから、育児環境の整備によって、仕事が出産・育児の障壁となることはないが、必ずしも産みたいと思った時に子どもを産むということではなく、男女それぞれがベストな出産のタイミングを計っていると言える。